續千載和歌集

十九

特別
イ4
3163
3(14)

貴
14
3163
3(14)

後醍醐天皇元應二年四月

権大納言藤原為世

松平乃記
東都蔵書

寿永二年百首謌奉りし時

春歌上

霞

前中納言定家

昨日こそ年をば送れ春霞

今日は若菜の野辺と成らん

弘長元年後嵯峨院の百首謌奉りし時

入道前太政大臣

おさまれる代の例とや春霞

初音も霞む空にしるらん

弘長元年百首謌奉りし時

従二位家隆

山風の霞を吹き乱る春の

常緑軒入道前太政大臣

朝日さす峯の初霞

夕されば三笠山さへ春めきて

太政門院御製

おぼつかな霞の衣かさぬれば

順徳院御製

常乃年浪の初てよるとをさして

郁芳門院安藝

常乃年を霞の衣ぬきとめて

九條内府

春の日の営の物語とかやうちまねびらん
三條右大臣家の屏風の
春立てふ日の空かすみ渡りて今朝の風さへ
今日ぞ吹きぬる　紀貫之
山里の春の夕暮来てみれば入相の鐘に花ぞ散りける
春の夜の夢の浮橋とだえして峯に別るる横雲の空
春日山おのへの桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなん
佐保姫の霞の衣ほすてふ名こそ惜しけれ
久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん
春風の花を散らすと見る夢は覚めても胸さわぎぞする
吉野山峯の白雪踏み分けて入りにし人の音ぞ恋しき
花の色は霞に籠めて見せずとも香を尋ねて来ぬ人はあらじ
春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる
梅が香を袖に移してとどめたり春は過ぎにし形見とも見よ
春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる
梅が香を袖に移してとどめたり春は過ぎにし形見とも見よ
春の夜の夢の浮橋とだえして峯に別るる横雲の空
春日山おのへの桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなん
佐保姫の霞の衣ほすてふ名こそ惜しけれ
久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん
春風の花を散らすと見る夢は覚めても胸さわぎぞする
吉野山峯の白雪踏み分けて入りにし人の音ぞ恋しき
花の色は霞に籠めて見せずとも香を尋ねて来ぬ人はあらじ

春の日の営の物語とかやうちまねびらん
三條右大臣家の屏風の
春立てふ日の空かすみ渡りて今朝の風さへ
今日ぞ吹きぬる　紀貫之
山里の春の夕暮来てみれば入相の鐘に花ぞ散りける
春の夜の夢の浮橋とだえして峯に別るる横雲の空
春日山おのへの桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなん
佐保姫の霞の衣ほすてふ名こそ惜しけれ
久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん
春風の花を散らすと見る夢は覚めても胸さわぎぞする
吉野山峯の白雪踏み分けて入りにし人の音ぞ恋しき
花の色は霞に籠めて見せずとも香を尋ねて来ぬ人はあらじ
春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる
梅が香を袖に移してとどめたり春は過ぎにし形見とも見よ
春の夜の夢の浮橋とだえして峯に別るる横雲の空
春日山おのへの桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなん
佐保姫の霞の衣ほすてふ名こそ惜しけれ
久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん
春風の花を散らすと見る夢は覚めても胸さわぎぞする
吉野山峯の白雪踏み分けて入りにし人の音ぞ恋しき
花の色は霞に籠めて見せずとも香を尋ねて来ぬ人はあらじ

梅枝よりおく

後鳥羽院御製
春の野にけふ出て見よや思ふさき(?)白雪
住吉社よ詠てまゐらせける百首哥中よ
若菜を　前大納言為家
下もえのわかくさ(?)白雪のさえ(?)との(?)ゐなかつむ也
寛喜元年女御入内屏風よ
常盤井入道前太政大臣
白妙の袖にかけて摘ためて君がためにと若菜つむ
雪中若菜といふ事をよませ給ける
御
法皇御製
袖の今日(?)うへ(?)なかつむ(?)
弘安百首哥奉りける時

入道前太政大臣
わかなつむ袖とぞ見ゆる(?)今日のをか(?)に
嘉元百首哥奉りし時若菜
太政大臣
わかなつむ人(?)よりもの(?)春の…
謙徳公家乃屏風よ春日野よ若菜つむ
若菜つむ…大中臣能宣朝臣
…清原深養父
若菜をよめる
春日野にいさ…
弘徽殿女御歌合に
相模

雲のいと細くたなびきたるを

松上雪といふことを

月まちえてそ帰るやま人

洞院摂政家百首乃歌

ちはやぶる松の梢の雪ふかし

藤原信実朝臣

春霞たつや日数も重ぬらん

常盤井入道前太政大臣

もろこしの人もや見ると思ふまで

雪ふきまよふ庭の白波

寛治百首奉りし時山霞

前大納言為氏

夜もすがら松の梢の

月前山霞

烟とも霞とも重ぬ山の端は

寛治二年百首歌時

後京極摂政前太政大臣の曙

のこる影も雲ぬ松風

柳

春雨もしとゝにふるやなぬまれ海士の袖もかわかん

藤原信実朝臣

濡もせぬ袖もあやなき柳かな雪中梅

前中納言定家

今上御製

清やかに咲ける梅の花ひらを折て
百首の中に
ふるさとの梅の花ゆゑ折つれば
袖さへ匂ふ心地こそすれ
寄梅恋
春風に匂ひを送る梅の花
誰ゆゑ人の袖に散るらん
九条左大臣女
寄梅恋
梅の香に我袖匂ふ春風を
誰ゆゑ人の心と思ふ
二品法親王覚助
寄梅恋
我宿の梅の立枝よ春風の
誰ゆゑ人に吹きつけつらん
寄梅薫風
後漢書院に初て
建長二年詩歌を合られける時
従二位行権大納言為家

那波波也女
名二所百首に梅の香を
梅の花たが袖ふれし匂ひぞと
ふりにし宿の春ぞ恋しき
前中納言定家
梅の花誰ゆゑ袖の匂ひぞと
問ふ人ごとに恨みつるかな
寄梅恋
我宿の梅の花ゆゑ春風に
誰ゆゑ人の袖匂ふらん
弘安百首に梅の花を
梅の花誰ゆゑ袖の匂ひぞと
問ふ人ごとに恨みつるかな
大納言隆博
弘長三年内裏に百首の会ありけるに
時帰雁

別をんの袖の露を思ひこそ海士も玉藻を
別らめ
　　津守國助

歸雁を
おのく分て雲に雁りかへるなみだの
　　永福門院

吉野山
　　中宮

梓弓
　　中務

寛平御時后宮歌合歌

春雨の
　　紀友則

千五百番歌合に
　　藤原三位爲子

待花と
　　津守國助

春哥下

寛治元前齋院

家に歌合し侍りけるに梅花を
後法性寺入道前関白太政大臣

照りそふる雪かとぞ見る梅の花
それも匂ひの色にまがへて

なのめなる夕月夜かな梅の花
ほのぼのとこそ匂ひそめけれ

吉野山峰の梅が枝折りそへて
山苞とやらん今ぞ見るべき

順徳院御製

緑なる木の間をそれと分けまがふ
雪にあやなき梅の花かな

後京極摂政前太政大臣

梅花盛りに侍りける夜
前大納言為氏

白妙の雪かとのみぞ見えまがふ
月の光に匂ふ梅の花

白妙の雪かとぞ見る梅の花
月の光に匂ひそへつつ

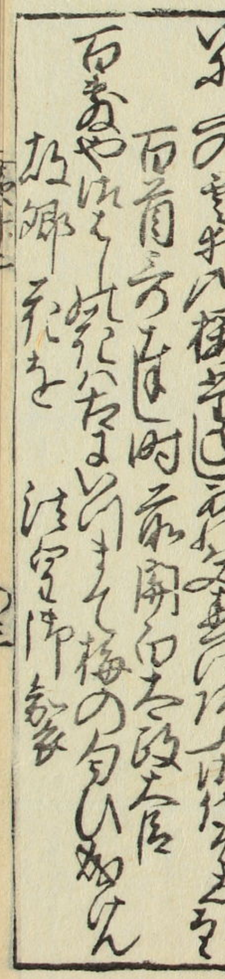
太宰帥にて侍りける時
正二位為家

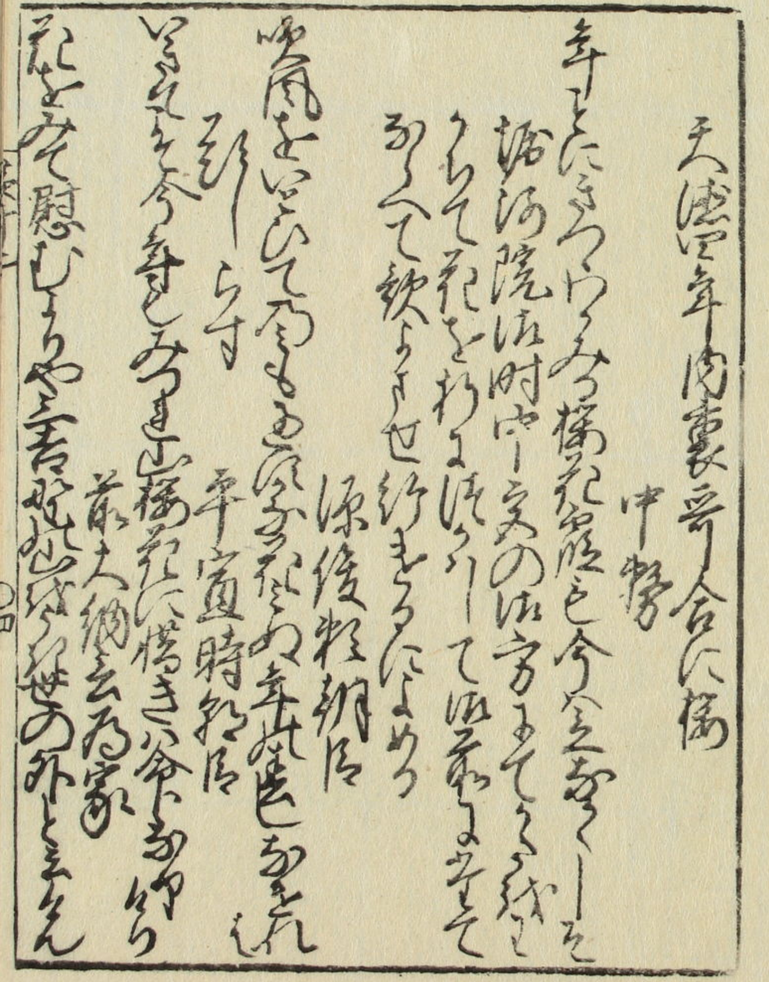
梅が香をしるべにて来る春の夜は
月の光も外山の霞

百首歌たてまつりし時
権大納言経継

白妙の雪かとぞ見る梅の花
月の光に匂ひそへつつ

平貞時朝臣





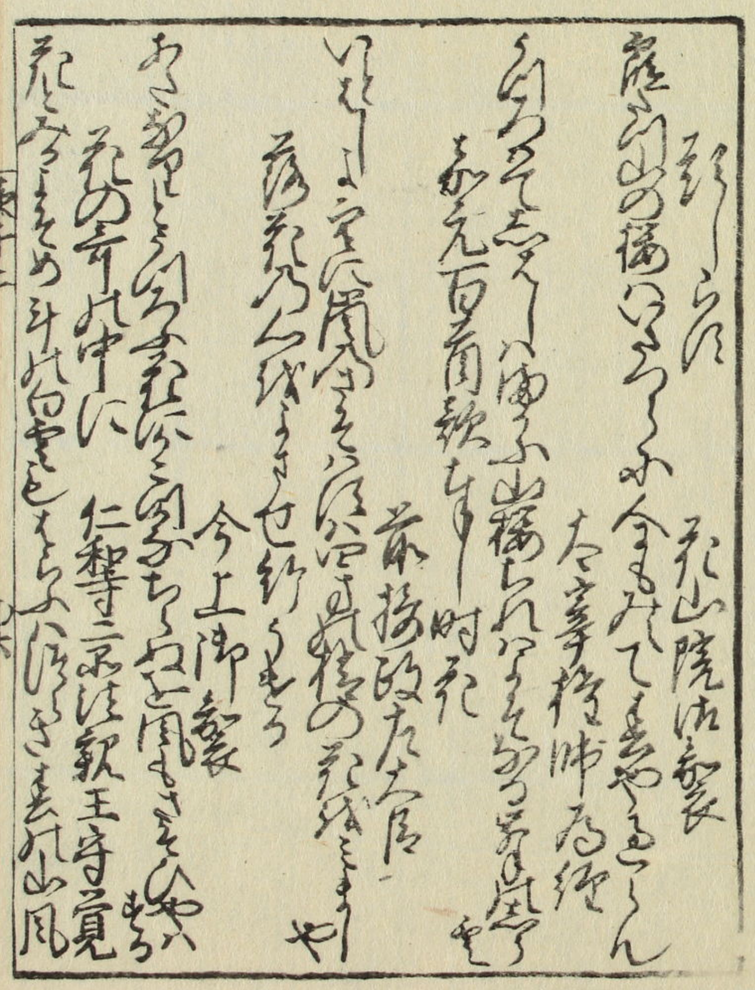
天德三年内裏哥合に梅

中務

年ふとも
昭陽殿時中宮の位方もそうくしを
もりて花を
もりへて秋
風をいとひて
うすもの
ふるさと
花をみて慰む

花の
さそ
五十首
花の
住
花の
花
花

弘安百首奉りける時



正治二年九月十首哥合に落花

前中納言定家

とはれつる人のやとの桜花ちらぬかひなき峯の嵐に

小野宮太后宮にて歌合し侍りけるに

けふ花はちりてそこそ人は盗むなれ

読人しらす

散ぬとも残る山桜花をしも風もまつらん

天徳四年内裏哥合に桜

中納言朝忠

あさみとり春にて桜花惜む心のとけぬらん

貫之

ちる時はうしと見れとも花は心にてこそまたれけれ

まれても桜かりつゝ桜花ちりつゝ風をまちやまるらん

よみ人しらす

建保四年後鳥羽院に百首哥奉りける時

春風は花ちらさくもあらはあれ心のうちに山桜かな

名所哥読侍ける中に

参議雅経

桜花ちる此里のわすれ水おとにきゝても峯の春風

惜落花といふ心を

津守国助

春風は花のをしみにたゝちの山桜かな

九条太政大臣

百首哥よませ侍ける時

入道前太政大臣

別てみむ春霞だにたちかくせ
逢坂の関の清水に影見えて
今や引くらむ望月の駒
　　蟬丸
これやこの行くも帰るも別れつつ
知るも知らぬも逢坂の関
　　清原深養父
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいづこに月やどるらむ
　　紀貫之
白雲の八重立つ山を越えぬとも
君に心を隔てやはする
　　僧正遍昭
吉野川岩波高く行く水の
早くぞ人を思ひそめてし
　　在原業平朝臣
山川の音にのみやは聞きわたる
人の知るべく瀬にこそありけれ
　　藤原敏行朝臣
我が宿の花見がてらに来る人は
あるじ顔にも立ちてけるかな
　　紀友則
春風の吹き上げにたてる白菊は
花かあらぬか波のよするか
　　素性法師
今来むと言ひしばかりに長月の
有明の月を待ち出でつるかな
　　中納言行平
立ち別れいなばの山の峰に生ふる
まつとし聞かば今帰り来む
　　在原行平朝臣
千早振る神代も聞かず竜田川
からくれなゐに水くくるとは
　　在原業平朝臣
ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし
恋しき時は道まどひけり
　　僧正遍昭
名にしおはば逢坂山のさねかづら
人に知られでくるよしもがな
　　三条右大臣
あひ見ての後の心にくらぶれば
昔は物を思はざりけり
　　権中納言敦忠
逢ひ見てのちの心にくらぶれば
昔は物を思はざりけり
　　右近
あふことの絶えてしなくはなかなかに
人をも身をも恨みざらまし
　　中納言朝忠
逢ふことの絶えてしなくはなかなかに
人をも身をも恨みざらまし
　　謙徳公
今来むと言ひしばかりに長月の
有明の月を待ち出でつるかな
　　素性法師
後の世も我を忘るな須磨の海
藻塩たれつつわぶと思へば
　　源重之
風をいたみ岩打つ波のおのれのみ
砕けて物を思ふころかな
　　大納言経信

春暁月といふことを

伏見院御製

月影は霞にこもる山の端にほのかにみゆる春の夜の風

延慶の頃御屏風に

みな瀬川

ひとりのみ見るはつらきを桜花盛りにあかぬ人もこそあれ

宝治百首の歌たてまつりける時離歌に

前大納言為家

山桜花をまちつゝよそにみてあかぬ心をたれにかたらむ

土御門院小宰相

春のみなとは今日のこゝろもかはらねば霞にまかふ山の端の月

同じ心をよみ侍りける

法皇御製

桜花散りかひくもる山の端にかすみてのこる有明の月

嘉元百首の歌たてまつりし時

権中納言公雄

暮ぬとて花の下風さそふらむ山の端ちかき春の夜の月

春の頃風の中に

権僧正覚助

後鳥羽院御製

花の香にかすめる月のかけをこそ夜半の嵐にさそはれにけり

弘安元年百首歌たてまつりける時

前大納言為氏

終夜は散りにし花の山の端をなかめてのみぞ明かしける

藤原松

春歌上

題しらず　　右大臣

ひとゝせのはるのはじめのけふよりは
　百年のうちの春ぞかぞへん

初春の心をよませ給ける　　関白内大臣

年をへてみるかひありと君がため
　なほ万代の春ぞかぞへん

春歌の中に　　前大納言公任

春毎に花のさかりはありなめど
　あひ見むことは命なりけり

人〳〵ふ五十首歌たてまつりける時　　前大納言公任

春霞たなびく山のさくら花
　うつろふ色を風にまかすな

春の歌とてよめる　　従二位家隆

ながめつゝ思ふもさびし山ざとの
　入あひばかり花の白雲

春歌の中に　　権大納言長家

春雨のふるは涙かさくらばな
　ちるをおしむと袖のぬるらん

題しらず　　和泉式部

春ごとに花のさかりはありなめど
　さてもいのちは人の待たるゝ

春の歌とてよめる　　和泉式部

春霞たなびく山の桜花
　見つゝこゆれど飽かぬ君かな

永久四年四月廿九日歌合

元百首奇
前関白太政大臣
夏歌の中に
今よりはと後
鳥羽院御
時郭公
題大納言師
郭公
皇后宮
思ふ心のおもかげと
通具朝臣
杜鵑なほ
初音の今
今出川院近
仕見院御製

その
初音
約束
注進
郭公
注進
二条
通具
平時元
藤原泰宗
南
第中納言季雄
権大納言兼季

曉聞鄰家吹笛

寧遠法師

山陽入道左大臣

時政時鳥

鄰にこゑもをしまぬ武家なれや
　　正治百首歌たてまつりける時

　　前中納言定家

時鳥こゑもをしまぬ仮の宿に
　　幾夜旅寝のかたりぐさぞも

　　光明峯寺入道摂政

やまもとのこゑにうつろふ時鳥
　　なくさめがほの月の下かげ

　　源頼長朝臣

郭公なくさめがほの月の夜を
　　いかでかあまの袖にとどめん

　　法眼慶算

寛治百首歌たてまつりける時

　　権僧正永縁

郭公なくさめがほの月の夜を
　　いかでかあまの袖にとどめん

　　堀河右大臣

時鳥思ひ入るさの山のはに
　　こゑのこるらん雲のはたてに

　　中納言俊忠

郭公なくさめがほの月の夜を
　　いかでかあまの袖にとどめん

　　法眼慶算

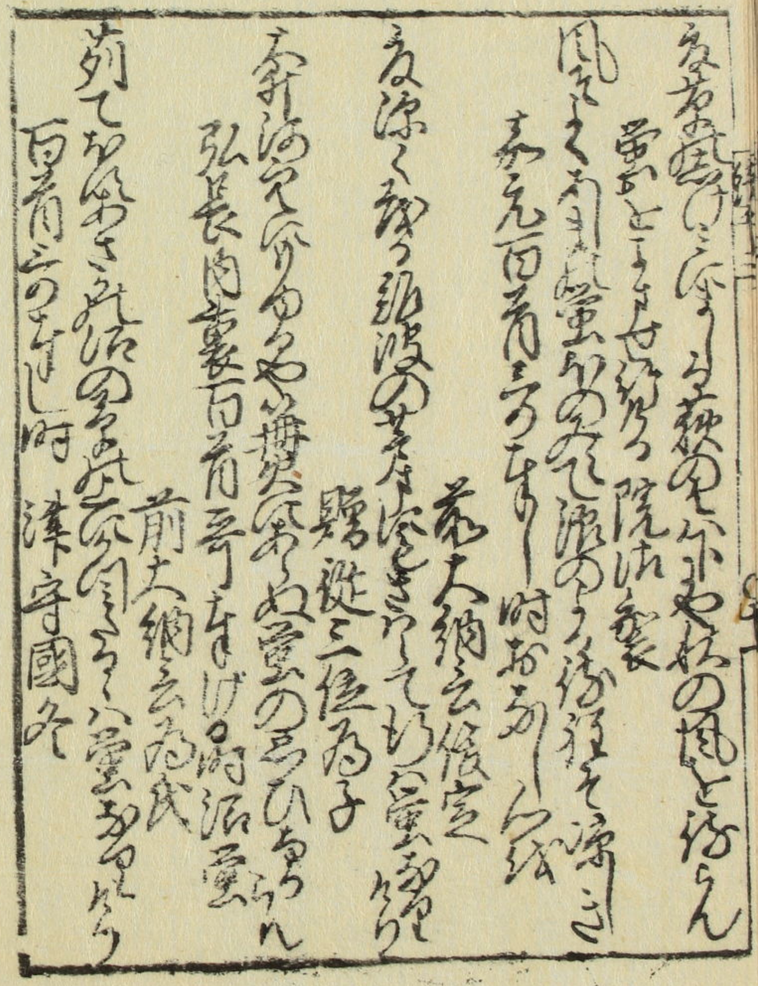
時鳥こゑもをしまぬ仮の宿に
　　幾夜旅寝のかたりぐさぞも

　　前中納言定家

時鳥こゑもをしまぬ武家なれや
　　正治百首歌たてまつりける時

　　山陽入道左大臣

永仁六年閏十月廿日
百首歌よませ給ける時
銀河
なかれてもたえぬ契りの
名にたてる
永仁二年内裏百首歌よませ給ける時
前大納言為氏
千とせまで君がみ国を
ながれてもたえぬ契りの
名にたてる
弘長二年内裏百首歌よませ給ける時
大納言重



しば里もありぬと宇多夕立の雲路をかけてふるなる
従二位行家
都(?)遠き雲の松原のはし(?)に見えて
文永二年七月白河殿にて人々題をさぐりて七百首歌つかうまつりける時
湊夕立といふ事を　前大納言為氏
真砂路吹きて塩風の空と成る夕立の雲
宝治百首歌めしけるついでに夕立
後嵯峨院御製
夕立の過ぎぬる雲の跡とめて入日さして
弘安百首歌奉りける時
前参議経清

一むらの雲のかかる夕立の名残はそれと涼しさ
百首歌奉りし時　入道前太政大臣
夕立の雲のあとゆく村雨に残る稲妻
夕立を　祝部成久
風吹けば晴るる空より夕立の雲
題しらず　中臣祐賢
杉むらのしづくの下に夕立の名残
弘安百首歌奉りける時　前大納言為氏
涼しさは夕立の後の風
題しらず　宇治入道前関白太政大臣
夕されば宿の風

建保四年百首哥なりける時
夏衣　　前中納言定家
久安百首哥なりける時
夏衣　　上西門院兵衛
山陰や　　前大僧正慈円
納涼
せきもるる　　藤原秀能
夏の夜の　　藤原家隆
夏草の　　藤原雅経

建保四年百首哥なりける時
夏衣　　前中納言定家
久安百首哥なりける時
夏衣　　上西門院兵衛
山陰や　　前大僧正慈円
納涼
せきもるる　　藤原秀能
夏の夜の　　藤原家隆
夏草の　　藤原雅経

百首歌奉りし時

水上花

秋歌上

百首歌奉りし時

入道前太政大臣

天河水かけ草乃いく秋かなれて年乃一よ待らん
中納言家持
七夕のわたりのつかの道し天河さしわたり照にやすらふ
山邊赤人
衣かへ七夕のあとこよひあまの河原にたつ ゆふあめ
亭子院歌合に　よみ人しらす
天河とらて渡る七夕のあふ心をは切りひきまさん
亀山院御製
くるま七月ゆめされけりたにまたくなれきさ
かけまさしけり時七月七日人
寂蓮
前大納言為家
銀河橋とそいふ七夕乃坊かゆかてまおそん限八
家乃六百番哥合に　左巧莫

星合乃空とおもふ夜はうちに乃空の照哉
後京極摂政太政大臣
七夕乃心を
二條大納言有房
織女乃衣の裾乃むかしからおなしきひとむかしの秋の道
八月前栽の歌合にてわたりて法成寺
入道前摂政のもとにつかはしける
堤子内親王
霧たちて七夕乃むかしを云ふやまの秋乃河原の暁の空
弘安百首歌奉りける時
入道前太政大臣
明ゆきて河世乃波の立帰り袖おりかなしき乃羽衣
源兼氏朝臣
題しらす

七夕の星合をまつ風神のまれハ空もさこそ雨られ
閏月七夕といふ事を　前中納言定房
数あれやおなし文月の数そへて秋またまさる星合の川　新
太神宮にたてまつりし百首哥の中に
後京極院摂政
朝露の野への荻原嵐にみたれて地ハ秋そかはりき
よみ人しらす
ひとかたによまさる八重の錦まて見しはなの萩の上風
正治百首哥たてまつりける時
前中納言定家
紫の色に出る萩の葉も吹こそ風の秋の夕暮
千五百番哥合に　二条院讃岐

さひしさは野の花の中にうつろひて萩の下葉の上に世
述懐百首哥よみ侍りける中に萩
皇太后宮大夫俊成
萩が花ちるらんをのゝ露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも
寛和元年内裏哥合に萩
花山院御製
萩の葉にたのむ白露むすひ置て袖にはぬれぬ秋の夕くれ
嘉元百首哥よみし時萩
権中納言公雄
露しける萩の下葉も消えやらて松風さはく
よみ人しらす
法眼慶融
吹むすふ萩の葉ことに置露の色にも秋の夕風

弘安百首之下

題しらす　　遊義門院
ぬしよあれ袖や露けき藤袴こゑ(?)さへ露をかけて匂はん
名にしおはゝ秋をすてぬ(?)匂ひなりけり
前中納言定家
秋の野のさる(?)ほとに見(?)し藤袴露けき袖の
高麗(?)景色(?)の露むすひて付(?)ける
九条右大臣
白露の(?)みつるそのみ(?)の花もさかは(?)風にまかせて匂ふ
題しらす　　律師(?)圓道
かはせし(?)袖も露の旅(?)の袖(?)にかゝる秋の夕風
前僧正道潤
あはれに(?)兼(?)蘭といふ事を
数〻に匂ふ草ともまた萩(?)も遊ひ(?)暮さん
天慶八年御屏風に
源公忠朝臣
秋の野にまじりてさける花なれは(?)ちりにしそての(?)
名にしおはゝいさ(?)ふらんさとの(?)きく
けふやたゞまでみてや秋の花にさし(?)
てさるへき秋の花をとゞめて(?)
院(?)まさしとまりそのはなに(?)織り
手付(?)けつゝ　　よみ人しらず
主や誰(?)秋の野の花やいかにかさ
選子内親王
ぬし(?)
名の花(?)さてや(?)草の風のまにのさけ

秋之夜鹿之歌一首 并短歌

秋之夜を 長しとそ思ふ 妻問に 我が来れば 戸も開け 待ちにけむ
妹し思ほゆ 出で立ちの 嘆きし息の 霧に立ち 雨と降るまで
我が嘆く 息嘆きかも 秋の夜を 長しと思ふ 妻問ひかねて

反歌

秋萩の 散りのまがひに 呼び立てて 鳴くや牡鹿の 妻恋ふるらむ

右、天平十年戊寅秋八月、大宰少弐従四位下小野老朝臣、卒す。

秋の夜の長きを歎く意を以て、妻問ひの事を述べ、次に反歌を載せたり。

秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くや牡鹿の妻恋ふるらむ

萩の散るまがひに呼び立てて鳴くや牡鹿の妻恋ふるらむ

秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くや牡鹿の妻恋ふるらむ

萩の散るまがひに呼び立てて鳴くや牡鹿の妻恋ふるらむ

秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くや牡鹿の妻恋ふるらむ

萩の散るまがひに呼び立てて鳴くや牡鹿の妻恋ふるらむ

行念法師
中務卿宗尊親王
後堀河院民部卿典侍
前大納言経房
千首奥時雨
前参議景綱

牡助行歌

坂河右大臣

紀淑光朝臣

津守國文

辛奥文

洞院摂政家百首歌

伝宗朝臣

津守國冬

津守國助

望有房宮女後成

関月

松間月

檜中納言為兼

秋亭下
月不撰処

みむろ山紅葉や晴ぬらん錦にかゝる月のさやけき

殿富門院にて人々百首よみ侍
けるに月歌とて読侍ける

前中納言定家

己知海士ちら瀬に舟出して人を待

河月を　　平維貞

奔河張た秋は岩もる月よりも水のしら浪

嘉元百首奉りし時

前関白太政大臣

風さらに山風の海も晴て月影きよし

従二位家人よみ侍ける時　住吉

十首歌合に　江上月

住の江の松の緑は吉にて空にぞ月の影

前大納言為氏

寛元々年長月の比仙洞にまいりて披
九月といふことを読侍ける

西園寺入道前太政大臣

住吉の雲も秋のち比の空の月

建治三年九月十三夜五首歌よみに江月

前右兵衛督為教

曇なき紀の海の入江の秋の月

秋歌の中に　宗恵法師

むかし迄八百計も月やむかし

平泰時朝臣

歌浦潟うちわたし
家五十首歌たてまつりし時

武蔵野や[illegible]秋のよの月

前大僧正仁澄

秋の[illegible]月は[illegible]

藤原右大臣

[illegible]月影[illegible]

津守國助

河風に[illegible]

永仁二年八月十五夜十首歌講せし

時山月聞[illegible]とよみ侍るを

為道朝臣

[illegible]の郷も[illegible]月

大納言隆[illegible]

新しらす

明やらぬ[illegible]

大炊御門右大臣女

[illegible]

百首奉りし時

前大納言俊光

[illegible]

前大納言為世

[illegible]

海上月を

素暹法師

[illegible]

恵慶法師

[illegible]

藤原[illegible]朝臣

新しらす

衣の破れもる春の雨
寛元二百首歌 光明峰寺入道前太政大臣

ふる雨のたえまもしらき村雨は
里擣衣
秋ふかみ露ふきむすぶ笹の葉に
もろくもちらす月の影かな

尾花ちる秋の夜さむに衣うつ
百首歌 従二位家隆
声のみぞきく月はしら露
秋夜中ノ

深草の里の秋風身にしめて
寛元百首歌 前大納言為家
うつや衣の袖の月影
擣衣

寒き夜の衣うつなり小山田の
関路擣衣
いほりもる秋のさ筵露ふけて
弘安百首歌 従二位為氏
うつ衣のみぞ夢をさますなりける
擣衣

秋さむき波の八重山ふく風に
海辺擣衣 前大納言為家
うつ衣のみぞ夢をさますなりける

前大納言為家
日吉社にて
さゝ浪や
寄法百首歌
あちきなく
摂政
おもひ
伏見院御製
遊義門院

百首哥
後京
摂政
弘安百首歌
大蔵卿隆親
亀山院御製

冬哥

時雨知冬

時雨妙空雲高迷神無月

山時雨

入道二品親王性助

弘安百首奉りける時

葛城や高根かすみて雲ふかき

谷より出る峯の白雲

春ふかき雲井の庭の花の色に

心ものどけき峯の白雲

春の色を雲井の庭に尽せとや

峯の白雲かかりそめけん

権中納言為相

雲ふかき谷の古巣を出でしより

峯の白雲立ちへだてつつ

権中納言実房

春ごとに花のみ雪と降りしきて

谷にも峯にも白雲ぞ立つ

後法興院入道前太政大臣

春ごとに花のみ雪と降りしきて

谷にも峯にも白雲ぞ立つ

権中納言為藤

春ごとに花のみ雪と降りしきて

谷にも峯にも白雲ぞ立つ

権中納言為村

春ごとに花のみ雪と降りしきて

谷にも峯にも白雲ぞ立つ

前大僧正実観

月乃歌奉りける時のちの月

おもふこと残すなかけそ秋の月

百首歌たてまつりし時 前大納言公蔭

やどからん人の心にまかせても

猶あかなくに出る月かな

前大納言公明

神垣や月もや雲のかけ橋を

亀山院御製

雲井猶やそぢの秋は澄みてこよなき

前大納言為世

冬の歌中に 平政長

多くなる身を知るかなと思ひ出でて数ふれば
百首の歌 右近大将通季

雪も降りまさりぬる時
ものごとに
思ふことなき
源清蔭朝臣

嬉しくも
風も吹かぬ
注空清慶

風吹かぬ
注二条院御製

雪も雪も
注二条院御製

百首の歌 権大納言経

西園寺入道前太政大臣五十賀し給ける時
つもりけり
お中納言定家

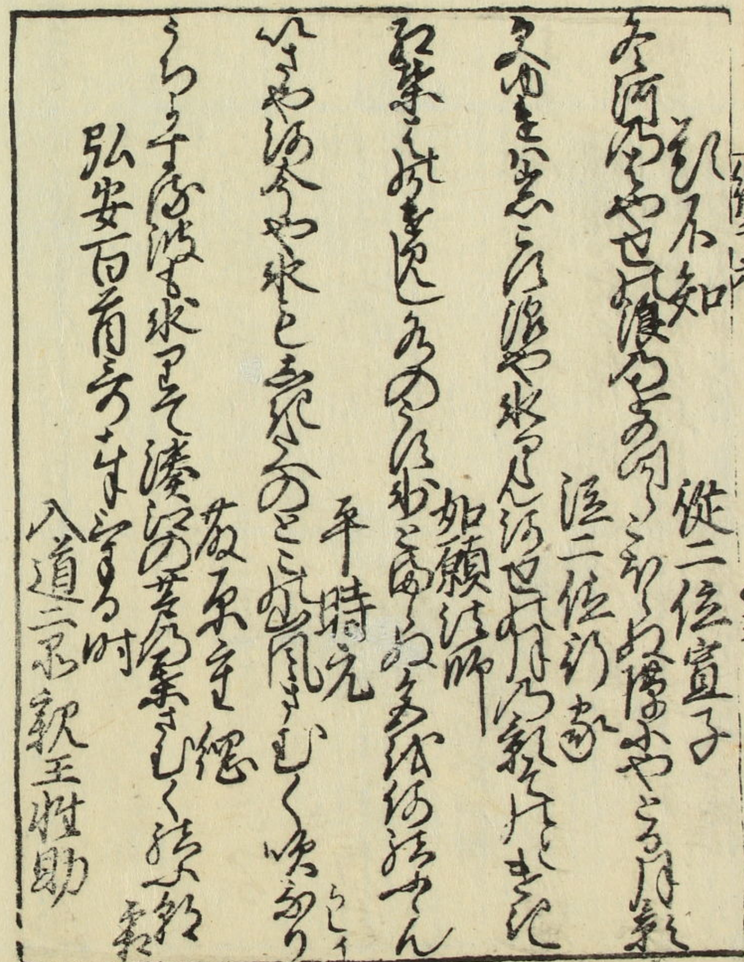
雪やまず
歌の
返し
西園寺入道前太政大臣

百首歌
百首歌
浦
権大納言実衡

歌詠みて
実治百首

那波と河内の堺なる
西園寺公通前太政大臣住吉社に奉
納ありしとそ
歌中に
難波なる堺の浦風
みよ雲中に
ふきとく雪の鳥を
文永元年内裏十五首歌
小夜更て
ふりつむ雪に
月冴て
千重村
津守國平
大教院門右大臣
和泉式部
兵部卿隆親

あさま小濱
有明の
月
權中納言敦忠
通ふ
水鳥を
浦人の
さゆる歌の
中務卿親王
山法や
池水に
鴨の
お中綱云宗房
源氏
今上御製



題しらず　　従二位家隆

みな河のみなせも知ず浪のうへに
うきたる氷ふたたびぞ見る

寄氷恋

弘安百首歌合に　　従二位家隆

氷ゐしてうき寝の床やさえぬらん
ふすまの袖も結ぼほれつつ

寄氷恋

弘安百首歌合に　　平時光

ふしわびぬ氷と見えし夜の衾
うちとけてだに結ぼほれつつ

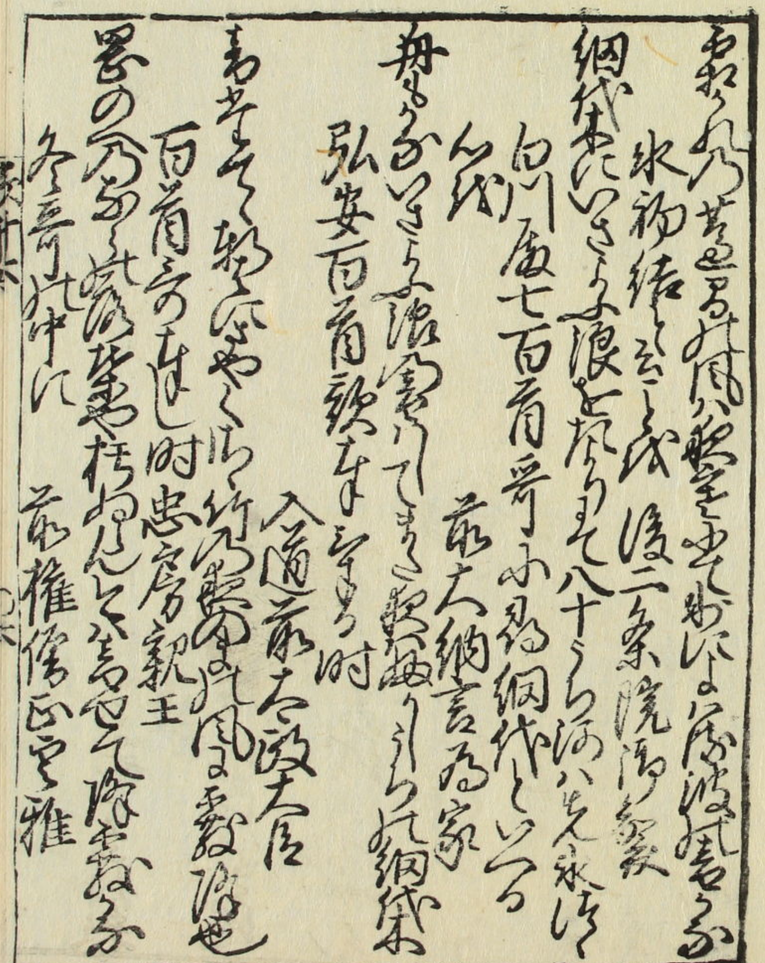
寄氷恋

弘安百首歌合に　　前参議教定

氷ゐしてうき寝の床やさえぬらん
ふすまの袖も結ぼほれつつ

寄氷恋

弘安百首歌合に　　入道二品親王性助



寄氷恋

弘安百首歌合に　　入道二品親王性助

氷初結ぶうき寝の浪の下ながら
細くぞ袖にかよふ夜の夢

寄氷恋

弘安百首歌合に　　前大納言為家

舟とめしうき寝の浪の下氷
とけてもなれぬ袖の上かな

寄氷恋

弘安百首歌合に　　入道二品親王

手枝ふく花をそみる白宮の[?]るかの杜乃梓ハ

ちりつもる花の及て桜かさ[?]の下草宮路はまう

藤原顕盛

春野山あれとふる宮みちをみてや[?]道

西行法師

相模

桐の笛吹[?]よ[?]は宮にかの外の浦をそそける

山桜[?]桐とふくる[?]とも宇治の道も宮の[?]

大江政國女

永仁二年五十首歌よみける時雪の

冬ふかく[?]の海の風[?]宮に[?]て[?]浦風

津守國助

題しらす

冬枯の尾花[?]しのむ[?]宮に[?]まよ[?]浦風

藤原家行

浦雲湯波とよろ[?]あれ[?]ける

前大納言爲氏

浦風は吹もて浪に[?]の武[?]けよ[?]白宮

百首歌の時

津守國冬

立田河氷のうへにれ[?]に[?]宮[?]ゆく

よみ人しらす

神垣は宮[?]ゆ[?]ひくと[?]の[?]松の下[?]

野辺[?]雪の[?]うきれし

皇后宮

宮[?]をはる[?]なる[?]の[?]さ[?]

雜躰

題知らず

こうの末代やうきよ
あるもうき山ぶよ
山ふかみ河うねり
妹乃松八河辺さや
久さるとに
もりおもて

又哥
郭公河久さ浴妻恋ふきよ
山し波乃久ゐの
嬉されも
ぬしの世に

ゆうてふ波今まで
久安百首哥たてまつる
花園左大臣家小大進

君ゑ代も幾
こゝろ久
ふみそ
はるそも
みゝかな
あもと
まむろ
さしあ

ひとりのそ　嘆ことなく　ゆえうれし
おもふらん　こゝろのうち　おもひやれ
もくろまん　かゝるあはれも　ありけれは
いとひて　ゆくさきまでも　なかれける
事なれは　なをもとゞめ　かたくして
なくなく　もとの里を　出ぬるそ
あはれなる

旋頭歌

もゝしきの　大宮人は　いとまなく
きてもくらしつ　春日山　おもひやる
時しなければ　天雲の　よそにのみ
ふりつゝ　仰ぐかな

きの世をも　ゆめうつゝとも　さだめなき
月哉

今様

もとの心を　つくさじに
うらみうかれて　出ぬれど
藤原隆信朝臣出家して後ほどなく
うせにけり年ごろ　ありもせで
事ありしやつれて　せめてのむさし小袖
白きを　着ながら
みやこをも　いでゝ　遠江
着なれつゝ　世をもわたるうつゝかな

逐一
あまてる光をまつもの世よりもそむきはてぬる法師ハ
隆信朝臣
折句歌
俤見院みこのもやまに侍けるころ
事ありてひさしくまいらざりけるを
をりてもたせてまいらせけるいふまゝ
ゆきもやらぬ山ぢかな
入道前太政大臣
ふるさとをさそひてきけるほとゝぎす
亀山殿池水
今朝ハとてそよめもはてぬ池の風
折句

ゆきもやらぬ山ぢかな
入道前太政大臣
ふるさとをさそひてきけるほとゝぎす
亀山殿池水
今朝ハとてそよめもはてぬ池の風
折句
夏草をおもひやりてや露ふかき
隆信朝臣
もゝとせをへぬる池の水
物名
すゝしさハ
源性法師
ふく風のおとにもあらぬ夏ころも
物名
うすさこそ
前大納言為氏
ゆふ露のおきてもやすくかへすらん
物名
ころも
為兼卿
ふく風のおとにもあらぬ夏ころも
うすさこそ

三条西大納言殿
かのえ
元の氣をふまる地なむ春の雨ものどかなる
庚申の歌合ゆるしの人々
仲勢大納言
物事をも司る男女もれ世業をえさゝ海さへ荒ぬれ
むやさゝ
當八元の雪ふりしむめの咲らん風も物あん
まゝりのそ
隆佐朝臣
世繼ものいそ
正治百首奉りし時
雪木葉後成

雜波
みをやかさゝく緑まつ夕桐の
さ紋
入道前太政大臣
風をとめ
雨そゝぐ神やをとめの
さゝらひ
神山に世へ
かそへもそ
をとめ
前中納言定家
お大納言為氏
もゝとせ
入道前太政大臣
さゝ
太政大臣

羇旅歌

權中納言敦忠

小野小町

那波さこ紀州の舟やうとかれも三ふの
舟やうみ新院御製
百首奇特入給ふ
那波さ舟乗ふ
波乃九を
洞さ神のみそ
舟出へくる
日数を
神堂にて
那波
大江忠成朝臣女
津守國助
つゝ
舟乗
菅原孝標

浦さみまてこふひや
夕潮と云こと
るゝと波波の
浪潟乃九
ふ浦よ浦り
あと元百首
ふ浦を
ふとも
接今
那右大臣
波二条院御製
浪乃九ふ
波
那右大臣
平安時
波
菅原孝標朝

猿ねよくなきさる山も草枕あやなしと秋はひとへに
前僧正公朝
あら物の葛蒲ふきて草枕ことに猿のなくらむそね
遂し
為道朝臣
詠しらす
峰のまつに猿の一枕猿の聲は暁まてきこゆる
平宗直
猿啼夢しいさし
夏むしよ猿ね谷の峯の梢より夜の雨を猿のなく
人のさけひてなきてそらの世のものまうき
平貞時朝臣
そ猿は猿啼風
おほ大納言為氏
夢さめていにし顕波の蓋風の出流にまぬ猿ねの夜風

名ににほふ峯のかけのまに聲の入江
源親長朝臣
猿イ
あけ行まにまに入江の秋の月影にしてかに猿なきなり
猿乃ん怨
篠枕いく夜か袖の露けきにまた猿の聲の夜深く
中務卿宗尊親王
野中のまくらを見ゆるとて
平政時
色そ野中は水のけしきもまた別もなし
詠しらん
江下園經
秋さむき山猿の聲の夜深くて月そ行方の名のあり
谷かけにすみけるこそ同行の心さらり
雲に入る月さそふみ人しらん

紀淑文朝臣

大江宗秀

惟宗忠景

源之経宣子

土御門院小宰相

権僧正義円院

観意法師

僧正遍昭

惟喬親王

僧都成尋

惟宗孝言

題しらず　　法眼雅国

うら山と思ひて出けハ猿の声よそにきゝし音ハ谷にて

　　寂恵法師

峰よりのぼる外ハ猿の声かよふ[illegible]の白雲

ありとハ今まりて問けるに年の暮なり

はりようとて猿なきけり

　　祝部成茂

聞ごろ年ハ[illegible]泪ハそろそろ世のならひとまよ

前大納言為氏[illegible]まへにて猿けり

まさり猿するに[illegible]しけり

　　源義行

峰さむき猿の声を聞[illegible]ならん

返し　　前大納言為氏

契りきしひさしき[illegible]猿の声に[illegible]

題しらず　　中納言為相

[illegible]の声も山遠き[illegible]猿の声は[illegible]

　　権大納言経継

[illegible]猿の声は[illegible]

　　[illegible]

[illegible]猿[illegible]

家百首歌中に　猿

　　後京極摂政前太政大臣

[illegible]

百首歌の中に[illegible]

神祇哥

遠長五年伊勢の御幸侍りて行基述懐と詠ける事を

後深草院御製

思ひきや八百よ年の後の世に我が国神の境内を見む

後宇多院御製

遠長五年伊勢の御幸侍りて行基述懐と詠ける事を

後深草院御製

思ひきや八百よ年の後の世に我が国神の境内を見む

後宇多院御製

秋國の内外の
あ元百そ
ふうあ
河
いもく
もし
大
平
そい

釋教哥

菩提心論曰〻漸如至十五日圓滿無

尋乃至

三摩地現前

十住心論入阿字門

真如親王

弘法大師

まく斗違塵をさとれる阿弥陀護念経をいくら也とも
観音院にてよみ侍りける　権僧正智弁
我心ちかひの山風も常楽我浄とこそ吹
志賀まて浪の立けれはみて
大僧正明尊
志賀乃浦浪虚空を我とはいかぬ事もなし
如秋八月雲霧微細清浄光の
心をよみ侍りける　前大僧正寛家
雲はれて秋の夜の月をこゝろにさとらしむ
妙観察智の心を
法印守禅

霧晴て今日ぬ雨乃出ぬ空も清き月の影かな
然此自證三菩提出過一切地を
前大僧正公澄
三乃月空にかゝる雲まなく出ぬる庭も常にてらして
大日経成就悉地品云垢妙清浄円
鏡常現前　了紹上人
曇なく照今そみるへき心の鏡
鳥羽院御時流布て地乃鏡を納て
奉し侍りける　覚鑁上人
ますかゝみこゝろの姿をうつしてそ世々の佛もかけにみえける
流返し　鳥羽院法皇
そしきて影も移る鏡乃さとりをそ

三玄院のおもてと法號と

この世にあるもの
仰ぐ　法空法誓
この世にあるものを九品の浄土へ移助
有空不二の心を注ぐ通教
むるものなり
法華経序品照千東方を
入道釈迦牟尼佛
我見燈明佛本光瑞如斯
源有長判

有見法華光瑞
方便品漸く積功徳
注眼親珍
量深の経も深く極りなく
毋の周忌は法華経を
奉るの心なり
くらに二巻奉るのを
前生なのをも
我心の車にのせ
信解品壁喩
壁喩の車にのせ
を衆院に奉
信解品壁喩云如童子幼稚無識の

心を
[illegible]
藥草喻品　傳教大師
[illegible]
侍賢門院中納言入道
[illegible]
[illegible]
[illegible]
安樂行品
[illegible]
涌出品

仁王経観空無我
と説て
き有情も空
色即是空乃至
無明老死
尽
不妄語戒
業識の根本
草繋比丘を
業とつなぐ
唯識論智

如是力
第中納言資
勸持品
壽量品
道基法師
指律師澄世

第中納言資
妙音品
普門品種々法恵趣
刑部卿敦
言語道斷心行所滅
第大納言忠

田順上人
後生
至量寺時經
猶如淨水洗除塵垢
紀伊國

日想觀應常專心繫念一處

照空上人

夕陽西
沒鳥羽院下野
想觀乃至十六

光明遍照十方世界念佛衆生
攝取不捨

源空上人

蓮生法師

佛開未知方便之門

順空上人

後生朝日

春日社

法華経

弘安百首

永福門院

信空覚圓

弘安元年百箇日のなげき

八通二尼欽亜性助

正和二年法華経奥書

八通順

覚稳上人

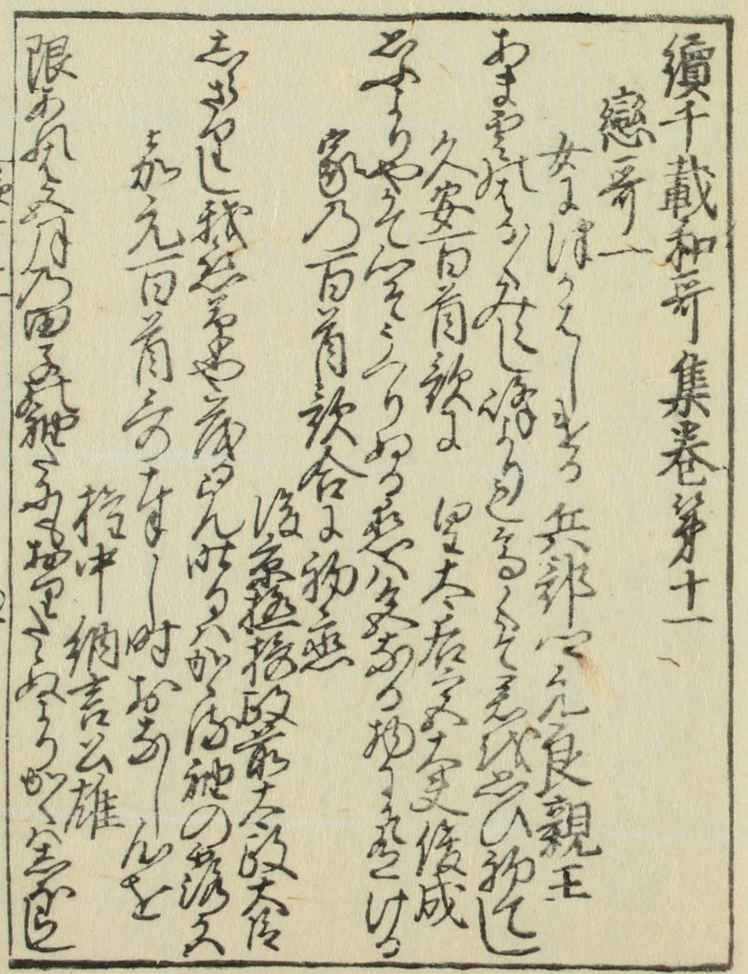
千歌注師

通西大臣

二条注歌王覚法

基俊

戀哥一



百首歌たてまつりし時　お開院大納言

我恋は淵となりぬ袖の上に
　　名のみ流るる涙なりせば　　前関白太政大臣

今までの秋の涙やつもりつつ
　　いとど深草の露ぞ重なる　　後深草院少将

ひとりぬるわが衣手のみ露ふけて
　　さむしろ寒き秋の風かな　　中院前大納言

今はただ思ひたえなむとばかりを
　　人づてならで言ふよしもがな　　お傳正二朝

わびぬれば今はた同じ難波なる
　　みをつくしても逢はむとぞ思ふ　　源兼氏朝臣

今のみと思ふ心の浦よりも
　　いかに海士の網の引く綱　　源兼氏朝臣

いかにせん神もあはれと思ふ酒の
　　我ゆゑ荒れし玉垣の内　　源兼氏朝臣

よもすがら
　　今宵あかすな神の秋風
　　弘長二年九月盡日内裏歌合に　　平時敦

その海士のいかに引くとも網ならば
　　我が袖の上も逢ふ心あれ　　権中納言公雄

源惠開歌

戀哥二

題不知

柿本人麿

ゆふされば小野の篠原風ふけばあだの思ひに我ぞまされる

源兼隆

ゆふされば衣手寒し高野山雪ふりにけり里もしぐるる

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

源信明朝臣

夕されば門田の稲葉おとづれて芦のまろやに秋風ぞ吹く

藤原良経

今こんと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな

源宗于朝臣

逢ふことの絶えてしなくばなかなかに人をも身をも恨みざらまし

源信明朝臣

弘安百首

永福門院

二月廿日新宮に詣侍りし時

永福門院

入道前大納言

百首の題を

民部卿

弘安百首

亀山院

千五百番の歌合に

大納言

平宣時朝臣

中宮

新續千 恋といふ事をよませ給うける

法皇御製

さよ千鳥なれぬる夜はの袖の上にいつかはなれし

たれぞの御中の三位為家

ありその松は難波の浦にしほ風のわかれて

稀なるかよひぢのあまのわたりぞ思ひ出でつる

中臣祐世

いまもこのむかしの世にあらぬ身のうれ

平時見

かくて消なばさぞなかなかに中々の

津守國助女

名をしりのなれしおもかげの人のまぎれに

寛治百首哥なりし時

前大納言為氏

あさからぬ契をたのむ中なれどつらさは人の

従二位家隆

ふるさとの松の葉をさへ心あるものにいはれて

曾禰好忠

ふきまよふ風のおとにも月ぞもる

中務卿宗尊親王

たまさかに思ひをかけておもふ人の

弘安百首哥なりし時

入道前太政大臣

物思ひにたえぬるものの世の中に

建保五年四月庚申朔 丁丑
とうの侍りけるに 後久我太政大臣
かくてもなほやつくさむ身の契り
あらんとぞ思ふ
海ならぬ
あまつそらとや思ふらん
おほぞらのくもゐをみても
おほかたのかすみにだにも
つねならぬ
世をばいかにと
後鳥羽院御製
亀山院御幸
感明釈迦
源兼康朝臣
承久信正通光
宮内卿
後堀河院御製

院御製
家に百首奇しみ侍りし時
二条院讃岐
万代の院御幸
中院権大納言
清涼殿
大江広貞

平幼氏
紀俊文
中院通親
源二位行平
承久の乱に

戀哥三

順徳院御製

俤とおもひもそへて心かなしきは出しまゝのこなたのゆふくれの色
秋色の嶺とはなきをやまた雲の空にかはるを
嘉元百首歌奉りし時　　法眼源承
津守国助
しくれゆくみむろの山もみちはの色に
永仁二年八月十五夜十首歌講せら
れし時月前といふことを
為道朝臣
いふせくも月の光はのとかなる雲路はるかにわたるを
永仁元年八月十五夜亀山院にて十首
歌奉られ侍りし時秋月

俤の海とふかき心を見えそめて秋の月みる人
津守国助
かそへしらす
寝覚するよはの秋の月の光にかはらぬを
宰相典侍
としふりし世に今宵もまたや月そすむ
大江政国女
秋風に袖やかはらむ月影を
春宮権大夫
わすれぬる秋のゆふへの月にそへて
中納言為世
後二条院位におはしまし時人々に
月前といふことをよませ給ひける
九月十三夜中に秋のよの月を

中納言家持

逢ことの絶てしなくは中々にまのあたりみえまし
紙衣人と紙子きて

右近大将道綱母

あすせやつ夜着の足のみ寒ければいかに久しきものとかはしる

中宮

身をあてゝ紙衣むすびきて冬をこもらむ

百首歌よみ侍りける時　入道前太政大臣

こゝもとて紙子にぬひてなみだにはぬれてもとのまゝならんかし

猶ぬれつ袖かわかぬ山ぶしの衣　紀淑望

思ひやれ今をかぎりの道芝の露ときゆらん人の身

貞応百首歌よみ侍ける時寄雨恋　土御門院小宰相

さてもや涙小雨の袖絶て待人の身をそらさん神ともなき身のいかにせん

恨れ今をかきなり世の遅洞の神　後二條院内侍

うき人をかきなりぬ世の道の身は　昭訓門院権大納言

うれしさを恨みつゝ年をへて人とさらに

藤原泰宗

涙にもぬれて紙衣のきぬ

よみ人不知　藤原基世

あるほどは一枚の紙衣

源具行朝臣

民部卿三位親子

按察使

お大納言家雅

二条為定卿

為信三位

按察使

人々

二品貞康

藤原基綱

後人

藤原宗秀

弘安百首

大納言隆博

廣義門院

法皇御製

こよひの鏡須磨にくもらぬ月影は

曇もさらて鏡かと合られ給しは

別岳のんびりきさせ給ふまゝ

みな南にこれや御かとを思ふ別に神乃御心の月

晴天きこいふ事と

今上御製

こひてみし秋やをしむ別後の涸によるをまつ

續九百首あまたよまし附 暁別恋

前関白太政大臣

出ても別れの後の涙はみてまし

おもふ別後消ぬうち月のの

百首歌よまし附

前實句大臣 押籠

ありあけの月ぞかなしき別れけるわかのうらのしくかは

正安四年六月五首歌合に暁別恋といふ

ことを　後二条院御製

閑守はあらぬわ別の袖よりもさらに別よ

百首歌よまれし附　内大臣

ゆかりありてもありし露の袂とみえつれは

恋歌中に　前左兵衛督教定

なくなく袂の露をつらんことの別れもの

寛治百首歌よみけるついでに

寄源恋　後深草院御製

この路ありつつ東風吹けぬ別涙の涸なかれ

女の涙よりかかりて流れけり

弘安百首

正和二年九月晦日十首会

寛治元年十月秩父
大納言為成

戀哥四

坂上是則

[illegible]

九条右大臣

[illegible]

延仁元年五十首哥よませ給ける時

[illegible]

ちるとみえしも林の岡の風のおとにかくれ八
前大納言為氏
千五百番歌合に　二条院讃岐
様にもあつめし軍ふつふ見て打あへる花の色は八
今日[illegible]をとりかはし
光明峯寺入道前摂政左大臣
まのみ道しらべの歌さへ今はただ秋のむらさきの夕
暮
洞院摂政家百首歌に
知りかしと　皇太后宮大夫俊成女
松風のなつかしきふしのしらべて[illegible]の[illegible]
家に五十首歌よみ侍りし時　絶恋
二品法親王覚助

わが別れしを[illegible]にしのびつつ[illegible]
ものしらず
前中納言[illegible]
恋しき人の[illegible]の[illegible]
九条左大臣女
書てもとのことに[illegible]とこしへの[illegible]
皇后宮内侍
ながめてもみる[illegible]の[illegible]
嘉元百首歌たてまつりし時　忘恋
前大僧正道玄
ききしそのこえの[illegible]
やすらはで
権僧正[illegible]
わすれて[illegible]

正三位行
従三位宣子
唯教法師
欽意法師
大江良重

けふは
津守國助
余をおもひて中島ある私ども人々相ともに
そこらそこらし世斗をはなりけるみまもる余よ
相ともに世斗物しるまでもあるべき
永福門院
ありし後をたのまむし世をたれもあるべき
前大納言為世卿
為定
後京極摂政前太政大臣
為家
後嵯峨院御製
為氏
亀山院御製
為世
後宇多院御製
為藤
後二条院御製
為定
後醍醐天皇御製
為明
後光厳院御製
為遠
後円融院御製
為重
後小松院御製
為尹
後土御門院御製
為広
後柏原院御製
為綱
後奈良院御製
為満
正親町院御製
為仲
後陽成院御製
為豊
後水尾院御製
為賢
霊元院御製
為久
東山院御製
為村
桜町院御製
為福
桃園院御製
為経
後桜町院御製
為理
後桃園院御製
為富
光格院御製
為栄
仁孝院御製
為良
孝明院御製
為敬
今上御製
為忠

せめてなをたゝ朕をおもふ人の
今さやまさきく朕も
山名氏清
宗氏
今さらにふりぬる年をかぞへつゝ
新田義貞
二条院讃岐
太政大将道嗣母

平泰氏
津守棟國
藤原宗弘

順徳院御製
永仁二年十二月十五日歌合

弘安百首のなけるに時
[illegible] 前大僧正隆弁
[illegible] そよぐ流よみ 勢多の橋もふるさと
[illegible] 中院右衛門督雅有
[illegible] 年貞資
[illegible] 年行氏
[illegible] 前中納言為世

正二位行権大納言藤原朝臣資
従二位行権大納言藤原朝臣成良
正二位行権大納言藤原朝臣家尊
従二位行権大納言藤原朝臣家奈
従二位行権大納言藤原朝臣資定
従二位行権大納言藤原朝臣資名
従二位行権大納言藤原朝臣資
従二位行権大納言藤原朝臣友則
従二位行権大納言藤原朝臣葉室

元弘元年八月廿八日
宣下
元弘元年九月廿日
宣下
元弘元年九月廿日
宣下
元弘元年九月廿日
宣下
元弘元年九月廿日
宣下
元弘元年九月廿日
宣下
元弘元年九月廿日
宣下
元弘元年九月廿日
宣下

戀哥一五

はじめて久しくあひ知りて侍りける人の

平忠盛

ほどもなくみかへりけるいつるの時よめる

いつるぬるのさ沼さはの水ぐきの

ねもしらずとてやまこもかるらん

前中納言定家

来ぬ妻をまつほの浦の夕なぎに

信實朝臣

寛治百首奉りける時春の歌

久安百首の題をさぐりて詠ませ給ひける

今上御宇
今上御宇
後亀
後亀山院御時
信實卿記

百首の内
法よ小まの為ハ
名ハおもふ
祝夕ハ
山中遊水
布一門乃遊
山ハまの
ま

和元百首のとき　入道前太政大臣

ふもとなる　おのが里にも　春来ぬと　梢を見ても　知りぬべきかな

吹きとく風　花の匂ひも　ふくるまに　雲ゐに近き　峰の白雪

正応六年内裏にて臨時の　土御門院小宰相

内侍参りて程なく　従二位家隆

よりて後も　雪ふりつもる　夜の月を　独り詠めて

今宵こそ　春待つ月と　思ひ出でつ　ものの心も　知らぬ昔も

源氏物語を　太政大臣宗秀

あまたの年経の　消えぬるも　おのが身ぞ　なほ惜しまるる

堀河院の　通法法師

堀河院の　山里ふるも　みな人の　思ひおきてし　ながらこそ

都よりまかりて　侍りしころ　法願法師

都にて　契りおきてし　ことづてを　今ぞ聞くとも　なき人の

遠保四年五月廿六日内裏歌合に

雲雨入望

西園寺入道前太政大臣

春雨を
染めもあへず
約束とうらみ
ながらも

後二条院御製

春雨に
染めもあへず
約束と
うらみながらも

寄花懐友

法印定為

花ゆえに
人をぞ
待つに
なぐさむ

権大僧正雅助

花ゆえに
人をぞ
待つに
なぐさむ

暁更又雨

花ゆえや
雨に
とよめる

前大納言為世

花ゆえや
雨に
とよめる

春雨

平宗資朝臣

春雨の
ふるに
つけても

遠路花

前参議教長

遠路
花と
いつつ

雨中花

前参議教長

雨中
花と
いつつ

旅宿雨

前大納言為世

旅宿
雨と
いつつ

合雨

後二条院御製

合雨
時雨
とぞ
いつつ

旬

前参議教長

旬
なる
山
の

雜下

今はかぎりの時、奥の方へまかりけるに、あるじの入道、
餞別し侍りけるに、よみ侍りける　信西入道

あくるまもしばしとぞ思ふ夜の間だに
　　別れを惜しむ人の心は　前大僧正慈圓

ふるさとの花のもとにて春風に
　　ちりなむ後ぞ君もこひしき　攝政太政大臣

吉野山おなじ梢の花ながら
　　物思ふ春の色ぞことなる　後京極攝政前太政大臣

物思ふ心は身にもそはなくに
　　山路の春ぞ人をやるべき　權中納言公經

むらさめの降りすさびたる夕暮に
　　人をまつ身もぬれまさりして　權中納言公經

ふるさとの花のあるじやたれならむ
　　我をも人も春ぞ忘るる　前大僧正慈圓

春ごとに花のさかりはありなめど
　　あひみむことは命なりけり　西行法師

ありて世に思ひ絶えぬる山桜
　　あはれ我が身の春にあふかな　津守國助

春風の吹きにし日より山桜
　　花の雪とぞ身は成りにける　藤原定家朝臣

桜さく山の[illegible]花の下みち
堀河院かくれさせ給ひて後の春花を
みける所に権中納言俊忠もとへつかはし
ける[illegible]中宮安房の
中にて道[illegible]
きる　京極入道前関白家肥後
桜花雪とふりにし[illegible]
返し　権中納言俊忠
君と[illegible]
花[illegible]　中務卿具平親王
[illegible]
宣秋門院

世の中[illegible]桜花
花になりにて[illegible]
しける　光俊朝臣
[illegible]花をかざし[illegible]
花の[illegible]　平行氏
[illegible]花
[illegible]　順西法師
[illegible]
[illegible]　平師親
前大納言為世よませ侍りし三首歌
に落花を　法眼兼藝

安倍忠見
平時香
安倍忠見
藤原景經
藤中納言資宗
高階宗俊朝臣

弘長百首

三條院の御時なりけれの初月
ゆひやるとてまて 平時夏女
つゆやとる秋まちえたる夕かな 前大僧正良信
まつ人も涙のとこにかこちけん 紀宗信
あやむる袖そとりかさねける 津守國夏
袂とも今宵そ分の秋の夕露 中務卿宗尊親王
伏見院御製

雲風今宵なりても秋乃おれと
ふる雨物凄風の音 後二条院御製
今さとて年ゆく秋の夕暮も 前大僧正良信
なる雨我袂ひる事 前大僧正良信
歎き 法橋
世乃人秋の夕暮や 後明門院大納言典侍
ふりて苔もおりまし 法印親玄

あしの葉もおのれ
は逢客と注
ゆふ立神もはらひ
山家月

寄松月

秋哥中に

津守國平

源親長

名所景

幻觀法師

の道前大納言

お大納言

幻

平親世

前大納言

後鳥羽院

平幻民

幻

清原久補

従五位下行大内記兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

従五位下行大学頭兼大和守菅原朝臣孝標女

永仁元年九月廿日叙従五位下

遠江守藤原朝臣為家女

母従三位藤原朝臣為子

中務少輔藤原朝臣為相

丹波黄長朝臣

大江匡房

お大納言源光
藤原経通朝臣

浦名も次第にゆん〳〵ゆう〳〵と波乃音ばかりを聞
松原の鶯秀
ゆるやかに浦うちかすみ立渡りて波もうつ〳〵と春の
津守社國
春の海汐の曇りなき空も波ふりうき雪のふりてつもれる
亀山院御製
弘安百首よませ給ひける
春きぬと人もおどろく波の音に霞ぬ浦の朝ぼらけかな
式乾門院御匣

春ちかき汐干の潟の波ふりて雪にあさるたづの一声
俊頼朝臣
春の日社頭
春日野の若菜つむ袖ふりはへて今こそ君が千代をしるらめ
法眼幻海
春の夜の夢ばかりなる手枕に甘くかひなき世をも経るかな
藤原秀能朝臣
春雨と幾そたの夜も吉野山花ふく風の音ぞ残れる
牧馬法師
春ごとに花の盛りを見る人〳〵ら守
うゐん人〳〵ら守
春日社頭
春日野の若菜つむ袖ふりはへて今こそ君が千代をしるらめ

弘安百首歌奉
亀山院御製

春きぬと人はいへども鏡山いまだ雪をば
かすみざりけり

山もとの花の梢は
百千鳥こゑぞ
ふるさと
ははるかなりける

弘安百首歌奉
亀山院御製

春きぬと人はいへども鏡山いまだ雪をば
かすみざりけり

山もとの花の梢は
百千鳥こゑぞ
ふるさと
ははるかなりける

弘安百首歌奉
亀山院御製

春きぬと人はいへども鏡山いまだ雪をば
かすみざりけり

山もとの花の梢は
百千鳥こゑぞ
ふるさと
ははるかなりける

弘安百首歌奉
亀山院御製

春きぬと人はいへども鏡山いまだ雪をば
かすみざりけり

山もとの花の梢は
百千鳥こゑぞ
ふるさと
ははるかなりける

那智の社にて為乃祢宜の書付ける

ひさかたの雲井まで来ぬ那智の滝
　　速懐を
今さらに今日山籠の身を知れば
　　為元々年廿首奉よ山家嵐
山ごもりおなじ心にあらそひて
　　二品法親王家五十首奉よ
　　第大納言為世
庵つくる松の木ずゑもそよぐなり
　　法眼静澄
　　宗厳法師

人ならぬ松ぞ友なる世にふれば
　　洞院摂政家乃百首うの山家
　　藻璧門院少将
山ふかみ友なき人の心にも
　　法印定為
おもひそめてぞ住まほしきかな
　　寂蓮法師
寂しさの住まほしきかな
　　家良内大臣
庵ある山のあはれを人ならば
　　後京極摂政前太政大臣
山家をも尋ねて住まほしきかな
　　津守國助

山雲よふる水とハ世ゝ
住もはて始もしらぬ
山ふかき世の外と
ふもおもひ
山雲気ひさしき
ハ
平宣時朝臣

延政門院一条

推家時後朝臣

山住や雨よとそ
寛喜二年大外記
中原師員朝臣

花の色ハ雨
西園寺入道前太政大臣
ヤつゝハ
うき
雨
神なる
雨
雨
後宇多院
雨
後二条

紫式部

雲の海ふかくも海もみえわたる空ゆく月のかけやさひ
ありしらす　相模

うき世そと思ひはてゝも命さへ深く惜む物と八知れ
藤原清正

命をはおしむかきりと定めおけはなからへかたき世をやなけかん
法印慈雲

うき身河命成漢をへて流れぬる我身なりけり
平時氏

いさそ世の人のつかふる年月八十の道にて命いきつる

あさましく世をすくしきてわか身たに

法印玄恵
暁達懐を

法師にて世に在(?)明(?)の月みむもかくてわか身八むかし

ありしらぬ
法眼行海

うき年にそへてつらき命にも我身をおもひすてゝしそ

君をさそ思ひよるへきなみまにもつけてかなしき涙八
藤原利行

安倍長有朝臣

かくれ家も人の住まる世を八十(?)年の風を歌くらん
権中納言公雄

いまもなほ君かため世にあはれとて年のさかりをすこしきて

昭慶門院一条

すゑの世にはなにも人もかはらしと思ひてもかなしまん

藤原宗忠
平忠盛
源義朝
平清盛
平時忠
平氏村
度会延滅

述懐のこゝろを
今年は何よりの喜ひ
家の名も述懐といふよし
中納言師家卿
源有長卿
正守参会
注申張参会
注申良家

あけぬれば暁おきはのこゝろを
時の名残の眠ぬるとも
うらなき夢に我身を
夢ならぬ夢ともかな
注申園伊
指俊正道忠
指俊正定卿
指俊正定卿
育大学而後知洪其大夢也といふ
九七
夢のうちに夢と覚ぬる
浮事如夢といふ心歟
大宰指帥資香
注眼幻海

藤原業連

後拾遺朝棟

橋柱

順空上人

民部卿資通

雜哥下

中納言朝忠

丹波長有朝臣

住吉ひそかに世をのがれ
百首のこと世に聞ゆ

頼つね世をうらなひ給ふ時
大僧正道順
乱れ
うき世をば今はかぎりの山ふかみ
住吉ひそかに世をのがれ
平時夏
恨つき世のみおほねの里
仕給相ま
くて筑紫にまかりて後も
加賀前基久
忘れぬ世にはまたや帰らん
平宗直
忘れ草おのが世々にはしげるとも
花の本散氏

忘れ草繁く
世にうきものと人や思ふらん
花の本散氏

忘れぬる人をぞ恨む夕暮は
花の本散氏

忘れ草おのが世々にはしげるとも
花の本散氏

忘れ草おのが世々にはしげるとも
中院村通
忘れ草生ふるかひなき袖の露
源隆兼

うき世にはいとひそかにすみの江の
昭慶門院一条

忘れ草生ふるかひなき袖の露

順助法親王

石兵衛尉基氏

二品法親王覚助

前右兵衛督惟方

七十九番

前大僧正仁清

前右兵衛督惟方

世の中をいとふ心を述懐の歌とてよめる

前大僧正慈善

ゆめのみよ

式乾門院作更

あれ百首の

大納言

おもふこと

あら

續千載和謌集卷第十九

陰明門院大貳

おもひきや[illegible]涙の色の[illegible]しとは

返し

右近大将通忠母

[illegible]涙そ[illegible]

右大臣 干時権大納言

[illegible]の根に[illegible]

[illegible]大納言冬基

[illegible]

後光院前関白太政大臣

[illegible]

返し

右大臣

[illegible]

大納言師氏

[illegible]

新院御製

[illegible]

永福門院内侍

[illegible]

亀山院の[illegible]をおもひ出て

[illegible]

前僧正道性

慈道法親王

秋霧の[illegible]

[illegible]平宗宣朝臣

[illegible]

てうみ物まいらせ 平維良
まいる 熱田宮司
伏見院へおはしまして
事ども申て後
うき世の習ひ
第六天の魔王
おもひ給ふ時
長明
返し
今年ぞ秋の
昭慶門院一条
うき世とも今ぞ思ひ知るかな
第六天魔王と云ふ
おもひける時 誦経のさまにて
長明
返し
今年ぞ秋の

為朝りうきう
給ひて
亀山院の
伏見院
旨ある
伏見院
今ひとり
式部
前大納言
前大納言
家嫌

つかはしける　後鳥羽院下野
思ひやれ心の杜の色も是を倍まさんことハふかしと
返し
秋のなかなか杜のとまんかたこそれぬさめの杜乃山里
おもひしは法印覚えひやる旅すらそ
立田姫の杜のさ時乃ちりけさ夕露と
よそて御覧れ
ゆきぬ下しるひやるさ紅葉る杜のかれ杜乃後ハ
伏見院くれさせ給ふ杜の葉まで
御けるさ夜　新宰相
時雨さ今日杜をそ分けれ涙ひまなき比のゆふまよ
安嘉門院くれさせ給ひけり時も月の

時雨て時雨の山ざとれハ
前権僧正教範
きくにしも涙の雨ふり時雨わかるこそ又紅葉のきねさも
前大納言為氏
とめられまする御幸も津守國助
とられて給ひし御返し侍りける
法印定為
いつまでか忍ぶ袖の紅葉さへ乃も月のそ
京極院おもひ出て御四十九日九月盡に
て給ふた御仏事の次にみて法堂
めうし給さ侍らしとりせける
前大納言為氏

新千載和歌集巻第十九

目次

三寶 釋教歌

神祇 賀茂遠久

諸社 平貞時

釋教 平宗宣

藻壁門院少將 為頼

後一条院御忌乃程ま人々十首歌讀
侍けるに　　法印覚守
常ことにぬれし袖の蝉の羽衣そてとやせし
歎しらす　　式乾門院御匣
鳥部山とはれし松も嵐や吹数そふ烟なるらん
六条入道内大臣女房身まかりにけるに
式部卿久明親王
立のぼる烟と雲も涙にや消にし雲のゆくへなるらん
近衛関白身まかりて年経ぬる事をおもひ
いでて　　高階宗成朝臣
身まかりてこもる山のかなしき世ふる烟にこの煙かな
藤原経綱妻身まかりて後又の年

なき人とよそにこそ見めよしや人を
思ひ侍りとて人々とはめまれはかなみ
て侍りける中に　　蓮生法師
あはれ世を涙にかゝる命も五十路かへりぬとなるらん
父子すまとききて歌侍りける法印定
乃歌　　前大僧正道昭
来しかたのはかなき人とぞわりなくなりぬる世の中の事をさ
平貞時朝臣身まかりて侍る時人のもと
にいひつかはす返事に
藤原重綱
そのかみとりしひとつの浦に又消ぬ人の雲井の袖
数て侍りける人の娘身まかりて侍ける

平時仲

つきせぬ世ゝのためしにも
亀山院十三年の冬
年内立春といふことを
ふたゝびつゞけて侍ける

前参議道性

ふたゝびの春をもかさねてしるしとや
菊原雅行朝臣
ふたゝびの春をもかさねてしるしとや

前参議雅有

ふたゝびの春をもかさねてしるしとや

賀哥

寛治四年
高陽院殿
寄月祝

前関白太政大臣

久しかれ天の恵みの
あれば光
あれば光

一条関白

民やすく國ゆたかなる
慶條六年
久かたの月
久かたの月

順徳院御製

上西門院兵衛
祝ふ乃心は
野辺も年経て松が枝にかけしこや千世の始なりける
行末遠き世を結ひける

後二条院御製
おほかたの八千代と君がためとてや風もなびかぬ松の緑か
鳥羽院御時崇徳院御製
引合ひて千代を契りし松が枝の末遠き世を祝ふなりけり
嘉暦二年内裏後番歌合に
子日
前中納言匡房
千世を経て今年も子日の松引きて八百万代を祝ふまでと
祈るらす
大蔵卿有家

子日せし松の緑の萬代を無き例にぞ引かれける
子日祝といふ心をよませ給ひける
後宇多院御製
松なきで緑をみひくんは子日の末遠き世の長き例に
文保元年正月当座にて人々題をさぐりて子日
をもて西園寺入道前太政大臣家にて次の年
の正月同しく詠ませ給ひける
生まれ来る年を祝ひし子の日の松に引かれて
たのむ太政大臣のかけさへつもる
今日しも君が千世の祝ひに引く松の若葉の
御返し
入道前太政大臣
頼もしき今日ぞ千年の松の葉のちりうせぬ例ぞ待つ

竹窓と
むすびの契の
乾元二年二月内裏
なとよみ侍ける
伏見院御製
万秋門院
大納言公任
延久元年五十首
お中納言定家

後法性寺関白前右大臣
万代え絶えぬあやめも今日はかけてまさにためし流　久しく
流れ返し
伏見院御製
菖蒲草引つる袖も今更に菊のため八千代世をも祝ひ
禁中乃菊を見て
後京極摂政太政大臣
菊の露もあまた千代さく流海水にそそぎて絶めぐる
とのこるも甚だためしにそえてまつりてもなきこと
よしあしも君にこそ出ぬとへて数ならず
出て心と小野宮右大臣殿ていきまで
て御返事には
後鳥羽院御製
しもやおかり孫あまたの松虫乃一枚よそ世をいとあへなく
寛治百首歌よまれる時秋田

前大納言基良
風まよふ我が袖にも匂ふ菊の花ひかれぬ君が代にひきかへて
文治六年女御入内屏風に
菊盛の紫ひまきうらぬ人のかよふ
前中納言定家
限なき世の菊花とぞもやいまいくへ世とちぎらん
鳥羽殿お秋合に菊を
藤原影綱朝臣
君が代は千年の若水にみずもはるかに世をたもつ
弘安七年九月九日三首歌講せられ
けるとき菊花契久といふことを
亀山院御製